

古代アメリカ学会 第10回西日本／第12回東日本部会合同研究懇談会のお知らせ
「記憶をめぐる言説の通時的研究：先スペイン期アンデスと植民地時代ユカタン総督領の
事例から」

第10回西日本／第12回東日本部会合同研究懇談会を以下の要領で開催します。ふるってご参加下さい。なお、今回は本学会初めてのオンライン形式(Zoom)による開催ですので、東西日本研究部会合同とし、多くの皆様に参加していただければと思います。また従来同様非会員の方も参加できますので、関心をお持ちの方にはぜひお声をおかけ下さい。

なお、今回は参加の事前登録が必要になります。参加登録の方法は後日お知らせいたしますので、今しばらくお待ちください。

〔研究懇談会概要〕

今回の研究懇談会は「記憶をめぐる言説の通時的研究：先スペイン期アンデスと植民地時代ユカタン総督領の事例から」と題し、ウェブ会議ツール(Zoom)を用いたオンライン形式で行います。アンデス地域の考古学とマヤ地域の歴史人類学を研究しておられる二人の研究者に、先スペイン期のアンデスと植民地時代ユカタン総督府領の事例を基に「記憶」がどのように継承され、その意味を変化させていくのかについての研究成果をお話いただきます。

〔日時〕 2020年11月15日(日) 14:00-17:40

- ・開会あいさつ
- ・発表1：14:10-15:50（発表時間1時間＋コメントおよび質疑応答40分）
- ・小休憩（10分）
- ・発表2：16:00-17:40（発表時間1時間＋コメントおよび質疑応答40分）

発表1 「儀礼実践の通時的観察によって明らかになる祖先の記憶の変化」

【発表者】 松本 剛（山形大学）

【コメンテーター】 北條 芳隆（東海大学）

【概要】

当発表では、この懇談会における共通テーマである「記憶」を考古学の見地から論じる。そうした研究はすでにいくつもあるが（Van Dyke and Alcock 2003 など）、方法論的には曖昧なものが多い。つまり、理論偏重で、必ずしもデータによって下支えされていない議論が目につく。こうした方法論的な問題を乗り越えようとする研究実践の一例として、いまから1000年ほど前にペルー北海岸で栄えたランバイエケ政体における埋葬や儀礼についての研究を取り上げる。

ランバイエケでは、祖先信仰と関連儀礼が政体を統合するのに重要な役目を果たしていたと考えられている。民族誌研究よれば、祖先信仰においては「名前や顔によって識別できる身近な死者」への信仰が、次第に「個人的な属性をすべて消し去られ、無時間性のなかで影響力を持ち続ける集合体としての祖先」への信仰へと変化するとされる。このプロセスを考古学的に検証するとともに、儀礼実践の通時的観察の結果明らかになった、さらなる変化について論じる。

発表2 「『記憶』(過去)と『いま、ここに』(現在)が会う時：『土地権原証書』の使用をめぐる一考察」

【発表者】大越 翼 (京都外国語大学)

【コメンテーター】小林 貴徳 (専修大学)

【概要】

1557年ユカタン総督領マニ村で作成された「土地権原証書」は、その後植民地時代を通じて何回か筆写された。これは、証書に言及されている地域の先住民村落間に起こった土地争いの度に使用されてきたからである。興味深いことに、証書は係争中の境界線において「音読」されてもいた。本発表では、「音読」を現地で (*in situ*) で行っていたことと、テキストに用いられている「読み方」を指示するピリオドなどの記号との関係を、記された『記憶』(*kahlay*)を「いま、ここに」呼び覚ます媒体としての「土地権原証書」という観点から読み解く。これは同時にマヤの人々の時間の観念、過去と現在の融通無碍な関係にも関わる問題であり、その中で、1557年当時には具体的意味を持っていた「内容=記憶」は、証書が使用される後の時代には別の象徴的意味を持って語られ、同時にその「過去」を「いま、ここに」結びつける要素が必ず挿入されて、現在に重層の意味をもたらすのである。

オンライン (Zoom) 事前登録制

※参加登録方法は、後日お知らせいたします。 しばらくお待ちください。

〔主催〕：古代アメリカ学会

〔連絡先〕：東日本部会幹事・鶴見英成 (et[*]um.u-tokyo.ac.jp)

西日本部会幹事・大越 翼 (t_okoshi[*]kufs.ac.jp)

古代アメリカ学会事務局 (info[*]americaantigua.org)

(上記のメールアドレスは[*]を@に置き換えてご使用ください。)